

レチフ・ド・ラ・ブルトンヌにおける快楽主義と 幸福主義の変遷

—『ムッシュー・ニコラ』, 初期作品, 『奇論集』の分析—

石 田 雄 樹

はじめに

西洋哲学は幸福観念を伝統的に二つの観点から考察してきた。快楽主義と幸福主義である。快楽主義は人生の究極的目標を快楽に置く。快楽を最大限に追求すること及び苦痛を最小限に抑えることが快楽主義の基本的な原則である。それ故に、快楽主義はその性質からして主観的であり、ときに自己中心的でもある。よって、快楽主義において、幸福の絶対的な指標は存在せず、その探求する幸福は個人によって変化する類のものと指摘できるだろう。一方、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』にその起源を持つ幸福主義は、人間のあらゆる行動は幸福の獲得のために存するとし、幸福主義において、幸福は美徳そのものであり、人間存在にとっての最高善である。この点において、幸福主義は個人的な欲求に基づくものではなく、社会的要請としての側面を持つ。幸福を人生の目的に据えるという点で二つの主義は共通点を持つが、個人的な次元に留まるか、あるいは社会全体を考慮するかという差異によって、快楽主義と幸福主義は性質を異にするのである。

レチフ・ド・ラ・ブルトンヌの自伝作品『ムッシュー・ニコラあるいは暴かれた人間の心』（1789）における幸福観念を分析したローレンス・モールは、本作が主人公ニコラの快楽主義的生活を描くことに終始しており、作中挿入される幸福に関する哲学的論考は修辭的なもので、本作の物語内容から幸福主義的要素を見出すことは難しいと指摘している。しかし、その一方で、モールは『ムッシュー・ニコラ』の幸福主義は、物語内容にではなく、作者の執筆姿勢そのものに存するのではないかという興味深い見解を次のように提示している：

Une tension se dessine entre la permanence d'une orientation hédoniste produite par une disposition au plaisir, et la dynamique d'une histoire du bonheur comme création et récréation constantes de soi ouvertes sur autrui et sur le monde, par lesquelles le bonheur existentiel n'est pas seulement dans l'acception sensuelle et affective ordinaire que lui donne Rétif, où le plaisir est premier, mais dans une expressivité fidèle à l'image de soi que l'écrivain se fait et qui constitue, en dernière analyse, un bien d'une extrême importance. [...] La dignité, le respect de soi, le sentiment de l'existence (que Rétif

oppose à la vie « automate »), la force de l'esprit, la contemplation, l'engagement moral, les jouissances de l'« âme » (« J'ai une âme qui jouit de tout ») sont des biens eudémoniques traditionnels qui dans le récit semblent proportionnellement peu exploités par rapport au plaisir¹⁾.

モールは、『ムッシュー・ニコラ』には快楽主義と幸福主義の二項対立が存在すると指摘する。そもそも本作には数多くの虚構が、あたかもレチフの実人生に実際にあったこととして描写されているが、それは作者が『ムッシュー・ニコラ』の主人公ニコラを通して、理想的な人生の創出をめざしたからにほかならない。その意味では、本作は紛れもなく快楽主義的性格を呈しているが、しかし、一方で、『ムッシュー・ニコラ』が作者の自己探求の上に立脚している点是否めない。この点をモールは「存在の感覚 le sentiment de l'existence」や「精神の力 la force de l'esprit」と指摘し、それらが幸福主義に帰することが可能な要素であると分析している。つまり、『ムッシュー・ニコラ』は物語内容の面に注目すれば快楽主義的であると断ずるほかないが、しかし、自伝作品を試みるレチフの姿勢には幸福主義的要素が見出せるというのがモールの主張の要諦である。

モールの指摘に従えば、自伝を書く試みと幸福主義の間には親近性があるということになるだろう。ここで注意しなければならないことは、レチフ作品には多かれ少なかれ自伝的要素が見出せるという点である。己の人生を形を変えて何度も繰り返し再創造すること、言葉を変えていえば、自分の人生を創作の素材とすることは、レチフ作品の特徴の一つである²⁾。その意味では、『ムッシュー・ニコラ』は、自伝的要素に拘泥し続けた作家レチフが満を持して執筆した自伝作品であり、そこに文筆による自己探求と幸福の獲得を目指すレチフの幸福主義者としての側面が反映されていることは疑いえないように思われる。

しかし、次の疑問が生まれる。なぜ、レチフは自己探求の文学を目指すようになったのであろうか。モールの論考は、『ムッシュー・ニコラ』の快楽主義と幸福主義の混在を説明しつつも、レチフの文学的変遷に関する考察が不足している。この問題に答えるため、本論では、初期作品から『ムッシュー・ニコラ』への変遷を踏まえ、レチフの自己探求の文学の生成過程を明らかにすることを目指す。

具体的には以下の手順で検討を進める。第一に、『ムッシュー・ニコラ』の快楽主義的性格がいかなるものであるか分析する。第二に、レチフが常に快楽主義的物語を描いていたわけではないことを、初期作品に見られる幸福主義の有り様から考察する。特に社会改革論『奇論集』と『ムッシュー・ニコラ』の相関関係に注目し、レチフの文学的変遷が示すレチフ独自の幸福主義を明らかにすることを目指す。

1. 『ムッシュ・ニコラ』における快樂主義

『ムッシュ・ニコラ』の目的は、「暴かれた人間の心」という副題が示すように、一人の人間の人生を一切の虚構なく再創造することによって、人の心の仕組みを明らかにすることだと、作者は序文で宣言している³⁾。無論、本作にさまざまなフィクションが挿入されていることは論を俟つまでもなく自明であるが、しかし、人間の隠された情念を赤裸々に物語ることをレチフが本作で第一に試みていることは疑いえない。

十八世紀の作家・思想家は多かれ少なかれ改革論に執着し、みずからの文筆活動によって、社会を変革することを望んでいた。レチフもまたその例に洩れず、たとえば『奇論集』はそのような改革熱によって書かれた最たるものといえるが、しかし、『ムッシュ・ニコラ』において、作者は哲学的な議論をことさら避けているような印象を受ける。それは本作においてしばしば問題とされる幸福についても同様であり、レチフは己の自伝の執筆において、「幸福とは何か？」とは問わず、幸福であった瞬間を描き出すことのみに努めており、本作が描き出す幸福の様相は、次の例が示すように、極めて快樂主義的である：

Mais Loiseau (=ami de Nicolas) me soutint, et s'il ne me préserva pas du libertinage, du moins il m'éloigna de la bassesse en me forçant, par son amitié, à me conserver quelque estime. Cependant, les dimanches et les fêtes, j'échappais à ses soins et à ceux de Renaud (=ami de Nicolas) ; souvent, après les avoir accompagné à la promenade, si nous n'avions pas de femmes avec nous, je les abandonnais, m'esquivant seul, pour retourner à Paris goûter de crapuleux plaisirs avec le sexe qui pouvait seul me les donner, n'importe de quelle nature ils fussent ; je ne vivais, ne respirais, je n'étais heureux ou malheureux que par les femmes. Je l'ai déjà dit ; je le répète ; peut-être le redirai-je encore⁴⁾.

上記の例では、いかにニコラが性的な誘惑に抗しきれないかという点が如実に示されている。ニコラの友人たちが、彼が放蕩に耽るのを止めようとする一方で、ニコラは女性の魅力に抗えず、友人たちの監視の目を避け、どのような性質の女性が相手であろうと、自身の欲望を満たそうとする様子が記述されている。「私が幸福であるか不幸であるかはただ女性の上に左右されてきた je n'étais heureux ou malheureux que par les femmes」という告白に赤裸々に示されているように、ニコラは情念の奴隷ともいえるべき存在として読者に提示される。もっとも彼は金銭欲や権力欲、食欲などからは無縁であり、ニコラが逆らえないのは、唯一、女性の魅力に対してだけであり、幼年期から周囲の女性に幻惑されてきたニコラが色欲を断ち切ることは不可能と思われるほどである。

このようなニコラの女性への傾倒が实际的な不幸をもたらす場合もある。その最たる例が、ニコラの罪の象徴として、作中、何度も言及されるパランゴン夫人へのレイプである。ニコラが敬愛し、彼の庇護者でもあるパランゴン夫人をレイプする場面は、次

のように暗示される：

Funeste idée, qui sera fatale à tous deux !... Mais je le proteste, nous ne fûmes coupables ni l'un ni l'autre... ou je le fus tout seul... Mais, non, je ne le fus pas, moi l'agresseur, moi⁵⁾...

作中計十回繰り返されるパランゴン夫人へのレイプの暗示は、上記のように、「不吉な想念 Funeste idée」, 「致命的 fatale」, 「罪深い coupable」といった語り手の悔恨の念を示す表現をしばしば伴う。このような描写は、本作がいかにか快楽主義的性格を持つとしても、作者が決して快楽主義的行動に肯定的ではないことを示している。この点において、レチフはサド侯爵などとは異なり、快楽の儚さを繰り返し語る。もちろん、ニコラは情念の奴隷であり、彼は幾度となく売春婦を買うが、しかし同時に強調されるのは、快楽のもたらす幸福の瞬間性であり、また女性といくら関係を重ねようと払拭することのできない彼の孤独である。それはたとえば次のように呈示される：

Enfin, Rose était froide depuis notre promenade. Edmée, Marianne, Colette, Fanchette, Rose, toutes cinq me faisaient éprouver la jalousie, ou passée, ou présente, ou future, le regret, le remords, l'inquiétude, la confusion. Aussi m'écriai-je involontairement, lorsque j'eus quitté Mme Parangon : « Que je suis malheureux !... » Un instant après, je me demandai : « Pourquoi ?... »⁶⁾

ローズ、エドメ、マリアンヌ、コレット、ファンシェットという五人の女性の名前が列挙される。このような固有名詞の列挙は本作の特徴の一つであるが、その効果は、具体的な情報を作中に挿入することによって作品の信憑性を獲得することであり、また作者レチフ並びに主人公ニコラの記憶力の高さを保証するものとして解釈可能である。しかし、ここではそれ以上の役割が担わされているように思われる。なぜなら、女性はニコラの人生において喜びを与えてくれる存在であり、ニコラが追い求める最たるものであるが、しかし、彼女たちが最終的にニコラに残すものは、「かつての、現在の、あるいは未来の嫉妬 la jalousie, ou passée, présente, ou future」, 「後悔 le regret」, 「悔恨 le remords」, 「不安 l'inquiétude」, 「困惑 la confusion」であるとされるからである。特に重要と思われるのは、「かつての、現在の、あるいは未来の嫉妬」であろう。この表現によって、性愛の快楽のもたらす喜びは、ニコラの人生の過去・現在・未来のすべてにおいて不幸を伴うものであることが明示されるのである。いわば、ここで女性のもたらす喜びに対し疑義を呈しているのは、作中のこの時点におけるニコラではなく、ニコラの視点を離れて、ニコラの人生を過去・現在・未来にわたって把握している存在、つまり全知の視点に立つ語り手であり、この語り手は自伝においては、作者と同一視することが可能であると思われる⁷⁾。

ニコラの人生は、女性を介して獲得される瞬間的な喜びとそれによって偶然に、あ

るいは宿命的に引き起こされる幻滅の間の絶え間ない交代に彩られている。ただ、この点に関して留意しなければならないのは、『ムッシュー・ニコラ』は肉欲のもたらす快楽への失望を示しながらも、しかし、倫理的問題を論じることはないという事実である。もちろん、レチフは彼の作家としてのキャリアにおいて、最も華々しい商業的成功を取めた『墮落百姓』（1776）で、地方からパリに上京し、墮落した生活を送る青年の生涯を描くことによって、都会生活の危険と放蕩の罪深さを描いた。だが、対照的に、『ムッシュー・ニコラ』は倫理的問題に関する関心を喪失してしまうのである。もちろん、わずかながら、言い訳めいた美徳と幸福の関係に関する論述は見受けられる。それは次のようなものである：

Rendez heureux un homme, heureuse une femme, vous avez tout fait. Calculez ensuite, et vous verrez que, du même coup, vous les avez rendus vertueux, c'est-à-dire aimables, bons, obligeants, ; que vous leur aurez sonné toutes les vertus sociales. [...] En effet, qui veut le bonheur, et qui le cherche, s'aperçoit, dès le premier pas, qu'il ne peut être dans le crime c'est-à-dire dans la douleur. Car jouir d'une femme, d'une fille, n'est pas le crime ; c'est d'en jouir pour la perdre, la rendre malheureuse ; si vous en jouissez pour la rendre heureuse, c'est une belle action. Point de bonheur que dans la bonté, la bienveillance, la charité, ou l'amour d'autrui... Le plaisir est la vertu, sous un nom plus gai⁸⁾.

ここで示される美徳の論理は、まさしく最大限の幸福と最小限の苦痛を目指す、快楽主義の指針に基づいた、レチフ的快楽主義の表明ともいえるべきものである。レチフの快楽主義は女性関係、特に性愛の領域に限定されているといってよく、快楽と美徳の安易な同一視が見受けられる。

『ムッシュー・ニコラ』は快楽主義と幸福主義の相克という問題に関しては、上記のごとき、表層的な意見を呈するに留まっている。もちろん、このような本作の見解は、神学教育に対し、批判的なレチフの態度も十分に関係しているとも考えられる⁹⁾。また、ニコラの女性関係のエピソードにおいて、「女性を幸せにするために快楽をともにするのなら、その行為は美しいのである」という意見を否定するものが少なくないことも事実であり、ここに作者の恣意性を見出すことも可能であると思われる。

ニコラの人生の軌跡は、彼が放蕩の後、いかに良心と美徳の呵責に苦しむ姿を描いたとしても、依然として彼が情念の奴隷であることを示している。その意味で、ニコラの物語は彼が己の情念とどのように付き合っていくかを描いたものでもあり、社会改革論者としてのレチフの側面を本作からうかがうことが困難であることは否めない。よって、『ムッシュー・ニコラ』の検討だけに留まるならば、いかに自己探求の文学として本作を解釈し、そこから幸福主義的要素を抽出したとしても、快楽主義的性格がなお色濃いと判断するのが妥当と思われる。しかし、レチフの作家キャリアを考慮すると、むしろ事実とは反対であることが見えてくるのである。

2. レチフにおける幸福主義：初期作品及び『奇論集』の分析

レチフの文学的変遷は、彼の幸福へのアプローチの変化の歴史でもある。留意しなければならないのは、レチフが望む幸福像は初期作品から晩年まで、大きな変化は見せていないと思われる点である。というのも、レチフが理想とする人生を構成する要素、たとえば、家父長制や農村での小規模なコミュニティの構築、数多くの女性と子どもたちに囲まれた生活といったものは、レチフ作品に定常的に観察できるからである。

レチフの作家人生における顕著な変化は社会改革への意欲に関してであろう。晩年のレチフが『ムッシュー・ニコラ』や自伝的小説『ルヴィ』(1798-1802)で個人的かつ主観的な幸福の充足に専心しているのとは対照的に、初期作品では、彼は啓蒙思想期の作家らしく社会改革への情熱にあふれている様が確認できる¹⁰⁾。たとえば、彼の処女作『美德の家族』(1767)は、そのタイトルがいみじくも示すとおり、文学を通して人々に美德を説くことにより、社会的幸福の実現を狙った一作なのである。作者の意図は次のように宣言されている：

En lisant l'histoire de monsieur de Lisse et celle de madame Blaker, j'ai fait une réflexion, qui doit bien empêcher les amis de la vertu de trop s'estimer eux-même. C'est que souvent nous ne la devons qu'aux circonstances [...] O mon amie ! je ne dis pas ceci pour désespérer une âme pure ; mais avec combien de soin doit-on saisir l'occasion du bien, et fuir celle du mal ! tout dépend presque toujours du premier pas ; et c'est une sorte de miracle dont on va voir un exemple, lorsqu'on a été vicieux comme miss K **, de pouvoir rentrer enfin dans le sentier de la vertu¹¹⁾.

小説という新しく生まれた文学ジャンルの地位を守るため、十八世紀の作家は小説の倫理的価値をしばしば訴えた。上記の箇所でも、語り手は悪徳から美德へと立ち戻ることが「一種の奇跡」であると指摘し、この小説が「美德の道へと回帰する一例」であると主張しているように、『美德の家族』でレチフが第一に喧伝したこともまた小説の社会的かつ公的な価値と役割であり、文学作品の教育的効果を、少なくとも『美德の家族』から『墮落百姓』に至る約二十年間にわたって、レチフは援用する。初期作品の中で特に世評の高かった『ファンシェットの足』(1769)において、レチフが自らを「厳粛な作家 *auteur grave*」と定義したことも、幸福と美德の両立という目的と無縁ではなかっただろう。このような言明は、『ムッシュー・ニコラ』が描く自己中心的な情念の物語とは対照的な作品内容の幸福主義的傾向を示している。たとえば、その典型的なものとして、『墮落百姓』の結末部に補遺として挿入された「共同生活を営むレチフ家によって起草されたウドン町の法律」は、理想郷ウドンの憲法とでもいうべき内容であり、都市の有害さと悲惨から身を守る術が中心的に記述されている¹²⁾。人々を教化することが目的であることは明らかであり、レチフ初期作品からはこのような調和と静謐に満ちた人生を送るための処世術が頻繁に描出されるのである。

このようなレチフの幸福主義的傾向は、全五巻から構成される社会改革論『奇論集』でその頂点を迎える。第一巻『ポルノグラフ』(1769)は、レチフが好んだ文学形式である書簡体小説の体で執筆されているが、それまでのレチフ作品とは明らかに異なった意図を秘めている。というのも、本書の狙いは売春制度に関する改革論を提出することであり、作品ジャンルの問題は明らかに二次的な重要性しか与えられていないからである。もちろん、『ポルノグラフ』が作者にとってはあくまで公的な有用性のために書かれているとはいえ、本書は公衆を憤慨させるに足る要素を十分に内包していた。なぜなら、売春は当時において一種のタブーであり、また、レチフの筆致は繊細な問題を扱うにはあまりに粗野かつ無邪気であったからである。だが、レチフは終始一貫して、『ポルノグラフ』の内容には自信を持っており、それはオーストリアのヨーゼフ二世が『ポルノグラフ』で提起された政策を実行したことを繰り返し宣伝したことからも明らかである。実際にはヨーゼフ二世が『ポルノグラフ』に関心を示したという事実はないにもかかわらず。

ここで重要なのは、『奇論集』の商業的あるいは政治的成功ではなく、むしろ『奇論集』に見られる利他主義であろう。レチフが文学の道徳的役割を強く意識し、初期作品に幸福主義的傾向があったことはこれまでの検討から明らかである。『奇論集』は幸福主義者レチフの「改革狂」としての側面が色濃く出たものと考えられる¹³⁾。だが、実際には、レチフはこのような幸福主義的傾向を徐々に喪失し、後の自伝作品では利他主義の側面がほとんど見られないことは先に述べたとおりである。この変遷は何を意味しているのだろうか。

この問題を解く鍵は、『奇論集』の最終巻『テスモグラフ』(1789)にあると思われる。『ムッシュー・ニコラ』の大部分が1785年から執筆されたことを考慮すると、1789年に公刊された『テスモグラフ』は『ムッシュー・ニコラ』の陰画としての側面を持つといえる¹⁴⁾。なぜなら、『テスモグラフ』はそれ以前の『奇論集』の他の巻と比較して、改革論としての形式的整合性を失い、雑多なテキストの集合としてのみその全体は理解可能であるが、しかし、『テスモグラフ』中に集められたテキストはそのどれもが内観性というそれまでの『奇論集』には見られなかった性質を有しているからである。

そもそも『テスモグラフ』は法律改革論として執筆されたものであるが、実際には法律論以外にも作者の個人的生活に想をとったと思しい劇テキストや乞食論、私的な日記など、レチフの個人的生活の反映と思われるテキストで、構成されている。また、改革論としての『奇論集』は第四巻『アンドログラフ』ですでに完結しているという記述まで『テスモグラフ』には現れ、『テスモグラフ』の『奇論集』における位置付けは読者にとって不透明なものとなり、最終的には『テスモグラフ』は作者の「気晴らし」に過ぎないという驚くべき言葉さえ読者に向けられるのである¹⁵⁾。要するに、『テスモグラフ』は社会改革論『奇論集』という幸福主義的企てを放棄する役割を担っているのであり、レチフは文筆家の倫理的・公共的使命を投げ捨て、極めて私的な、内観的な世界へと没入してしまうのである。

『美德の家族』から『ポルノグラフ』までの幸福主義的試みと『テスモグラフ』や『ムッ

シュー・ニコラ』に見られる幸福主義の放棄、あるいは快樂主義的自伝の間の変遷はどのように解釈することができるだろうか。この問題を明らかにする一つの方法は、『テスモグラフ』と『ムッシュー・ニコラ』の共通点である「自己探求」や「自己のエクリチュール」を検討することであろう。

『美德の家族』と『ムッシュー・ニコラ』を比較したとき、明らかなのは、『美德の不幸』で試みられた美德の称揚が後者では打ち捨てられているという点ばかりではなく、『ムッシュー・ニコラ』では内観的傾向がより前面に打ち出されている点である。レチフは時代を降るに従って、より主観的かつ精神的な問題に関心を寄せるのであり、『テスモグラフ』における社会改革論の放棄はまさに彼のそのような文学的関心の反映であると思われる。その意味では、『ムッシュー・ニコラ』が呈示する幸福観はときに独我論的と形容することが可能なほどで、文筆による理想的な社会の創出を断念したかに見えるレチフは、以下の『テスモグラフ』の一節が明示するように、自己探求に専念するようになる：

Au moins (dira Quelqu'un), l'erreur soulagerait le Peuple, dans le cas où il serait tellement opprimé, qu'il ne pourrait, malgré tous ses efforts, secouer le joug, ni s'échapper, ni aller respirer avec les Loups. N'est-il pas à souhaiter alors que l'on châtre les Esprits ? que la raison sommeille ? et que pour empêcher le désespoir ou la rage, on convertisse les Sujets en Chevaux et en Bêtes-de-somme ? La supposition est peut-être un peu forcée ; mais en l'admettant, je désapprouve un remède qui m'ôte le droit à la vertu. Après celle-ci, le désespoir et la rage me paraissent le secours de la nature, et le plus digne de l'Homme. J'aime mieux cesser d'être, que d'être au-dessous de moi-même¹⁶⁾.

上記の箇所は、『テスモグラフ』の第八書簡に挿入された一節であり、作者はここで「騙されていることは人々にとって有益であるか」というテーマで論説を行うと言明している。いかに『テスモグラフ』が改革論としての実質を喪失しているとしても、この箇所での作者の狙いが人々を啓蒙する点にあることは疑いえない。注目すべきは、啓蒙を主眼とした論説が、一転して、レチフの文筆活動に対する態度の表明としても解釈することが可能である点である。

まず、レチフは人民が騙され、搾取された状態にあることを指摘する。ここで問題にされているのは社会構造そのものであり、またそのような社会において、人々の精神は弱り、理性さえも麻痺状態になってしまうと作者は述べる。興味深いのは絶望と怒りの価値をレチフが訴えている点である。「私は美德への権利を己から奪う救済手段は拒否する」とあることから、レチフにおいて、絶望と怒りは美德と反するものではなく、むしろ人間の尊厳に必要な欠くべからざるものとして、肯定される。この箇所からは、社会への不満と人生への絶望を繰り返し強調する『ムッシュー・ニコラ』のニコラの人生観も想起される。しかし、「自分自身より下の存在になるくらいなら、生きるのを止め

ることを私は選ぶ」という最後の一節は、そのような不幸な人生を積極的に受容しようとするレチフの意志がうかがえる部分であり、ここにレチフ的幸福主義の一端が見出せるのではないだろうか。まさしく上記の『テスモグラフ』の一節は、現実の悲惨と絶望を認識した上で、現実以外の場所で己の幸福を実現しようという、レチフの文学観の決定的な変遷を意味しているのである。

『テスモグラフ』の形式的整合性の崩壊と『ムッシュー・ニコラ』の物語内容に注目すれば、レチフは一見して、自身の目標として『奇論集』の執筆当初に掲げた改革論という社会的使命を放棄しているように見えるが、しかし、『テスモグラフ』の上記のような内的独白というべき箇所は、レチフの文学への向き合い方への態度の根本的な変化を暗示しているといえる。いわば、レチフは公的な美徳の称揚から、美徳の私的な実践である自己探求の文筆活動へと移行するのであり、まさにこの点にこそ、レチフの文学的変遷が示すレチフ独特の幸福主義が存するのである。

結論

『ムッシュー・ニコラ』は物語内容のみに注目すれば極めて快楽主義的性格が強い作品と指摘できる。しかし、自伝執筆という作業には、自己分析・自己探求といった幸福主義的要素を見出すことが可能である。そもそも、レチフはその作家キャリアにおいて個人的な快楽の探求のみに関心を示していたわけではなく、初期作品において、彼は第一に美徳の称揚を試みていた。社会改革論『奇論集』がその典型的な例である。だが、レチフは次第に内観的な傾向を示すようになり、その変化は彼が新たな美徳の実践の可能性を文学に見出したことを物語っている。すなわち、自己探求の文学の実践である。想像力による幸福の実現こそがレチフの第一の関心となり、『テスモグラフ』と『ムッシュー・ニコラ』はそのようなレチフ独特の幸福主義の結実といえる。レチフの望む幸福は、絶え間ない内省にのみ、存在するのである。

(日本学術振興会特別研究員)

註

- 1) Laurence MALL, « Bonne vie ou vie bonne ? *Hedonia* et *Eudaimonia* dans *Monsieur Nicolas* de Rétif de la Bretonne », *Le Bonheur au XVIII^e siècle, études réunies et présentées par Guilhem FARRUGIA et Michel DELON*, Presses Universitaires de Rennes, 2015, pp. 162-163.
- 2) Cf. 森本淳生, 「主体, 欠如, 反復: レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ『ムッシュー・ニコラ』と虚構的自伝」, 『人文・自然研究』, 第7巻, 一橋大学大学教育研究開発センター, 2013年, pp. 87-143.
- 3) « Inconcevable labyrinthe du cœur humain ! Ô chaos, qui renfermes tous les contraires, qui

te débrouillera ?... Moi, dans moi-même. Je ne déguiserai rien, ô lecteur ! ni les vices, ni les crimes, ni les turpitudes, ni les obscénités !... Oui, j'avouerai jusqu'aux motifs secrets qui me font écrire mon histoire. Je veux du moins avoir ce mérite, d'étonner par l'excès de ma sincérité ! » (Nicolas Edme RÉTIF DE LA BRETONNE, *Monsieur Nicolas ou le cœur humain dévoilé*, 1797, Édition établie par Pierre TESTUD, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. I, p. 5).

- 4) *Ibid.*, p. 979.
- 5) *Ibid.*, p. 370.
- 6) *Ibid.*, p. 815.
- 7) 実際には自伝における語り手と作者を同一視することが可能であるかどうかは困難な問題であるが、本稿では語り手の視点の問題には立ち入らない。
- 8) RÉTIF DE LA BRETONNE, *op. cit.*, t. II, pp. 306-307.
- 9) レチフの神学教育に対する批判の根底には、異母兄弟のトーマ・レチフの教育手法への不満があると思われる。彼は宗教教育のみが重要であり、ラテン語の学習さえ不要と判断した。学問に大きな情熱を抱いていたレチフにとって、トーマの考えは許容しがたいものがあつた。Cf. Pierre TESTUD, *Rétif de la Bretonne et la création littéraire*, Genève-Paris, Droz, 1977, pp. 22-25.
- 10) レチフの最晩年の自伝的小説である『ルヴィ』の冒頭で、作者は本作の目的が『ムッシュー・ニコラ』で描けなかったものを描くこと、つまり幸福な人生を描くことである点を強調する。レチフは自分が考える幸福な人生の想像世界での実現を目指すのであり、その幸福には金と女という二つの要素が大きな位置を占めている。Cf. Yuki ISHIDA, « L'évolution de l'imaginaire de Rétif de La Bretonne, de *Monsieur Nicolas aux Revies* », 『フランス文学研究』(東北大学フランス語フランス文学会), 第36号, 2016年, pp. 15-26.
- 11) Nicolas Edme RÉTIF DE LA BRETONNE, *La Famille vertueuse*, 1767, Genève-Paris, Slatkine Reprints, 1987, t. 1-2, pp. XXXIII-XXXV.
- 12) « Tels sont les moyens que nous avons employés, pour préserver à jamais nos Enfants de l'inévitable contagion des Villes, et les garantir de la misère qu'on n'éprouve que trop souvent dans les Campagnes ». (Nicolas Edme RÉTIF DE LA BRETONNE Rétif, *Le Paysan pervers*, 1775, Genève-Paris, Slatkine Reprints, 1987, t. 3-4, p. 193).
- 13) Cf. 小澤晃, 「改革狂の潰えた夢：フランス革命期のレチフ」, 『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』, 第47巻, 1998年, pp. 107-126.
- 14) Cf. 石田雄樹, 「レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ『テスモグラフ』における自己分析的傾向について」, 『文化』, 第77巻, 東北大学文学会, 2014年, pp. 21-34.
- 15) Nicolas Edme RÉTIF DE LA BRETONNE, *Le Thesmographe ou Idées d'un honnête homme sur un projet de règlement proposé à toutes les Nations d'Europe pour opérer une réforme générale des lois*, 1789, Genève-Paris, Slatkine Reprints, 1988, p. 587.
- 16) *Ibid.*, p. 406.

L'hédonisme et l'eudémonisme chez Rétif de La Bretonne **analyse de l'évolution entre *Les Idées singulières* et** ***Monsieur Nicolas***

Yuki ISHIDA

Dans la culture occidentale, on envisage le bonheur traditionnellement et historiquement sous deux angles différents : l'hédonisme et l'eudémonisme. L'hédonisme considère le plaisir physique et moral comme le but suprême et le principe moral de l'homme. De l'autre, pour l'eudémonisme, le bonheur est la finalité même de toute pratique humaine.

Les œuvres de Rétif de La Bretonne sont en général considérées comme hédonistes dans la mesure où *Monsieur Nicolas*, son autobiographie, représente la vie hédoniste de Nicolas, héros et *alter ego* de l'auteur.

Certes, la description de la vie de Nicolas dans *Monsieur Nicolas* donne au lecteur une impression d'hédonisme, parfois même d'égoïsme. Il ne serait néanmoins pas juste de penser que Rétif se situe uniquement du côté de la poursuite du plaisir personnel.

Dans ses premières œuvres, Rétif vise à ce que son écriture soit une promotion de la vertu. *Les Idées singulières* témoignent particulièrement de cette tentative. Pourtant, Rétif devient de plus en plus introspectif, parce qu'il parvient à une nouvelle vertu, la quête de soi. Seul l'imaginaire lui permet d'accéder au bonheur, au-delà des entraves réelles. L'imaginaire déploie son art de vivre heureux. *Monsieur Nicolas* et *Le Thesmographe* mettent en pratique cette vertu. L'eudémonisme rétifien consiste dans la quête de soi. Il n'y a de bonheur possible que dans une introspection de tous les instants.